

二つの詩

藤 澤 玄 唱

微 笑

沈黙の小池に石ころ一つ投げこんだら
ひとりぼつちの俺の様に

寂しく微笑みました

沈黙の小池

俺の友達

我 が 心

あはれなる我が心

宵闇にまたく星に似て

廣き宇宙の中で聲も出しえず

おし黙つて

いつの日も涙に曇る瞳で

冷たい自己をみつゝ

たど吐息つくのみ

出た。こゝで又大きな波を驚かされた。ド、と押寄せて、ザ、と引揚げる旋律に、暫し見とれた。僕等は一生懸命に、波に美しく洗はれた小石や、貝殻を集めて豫ねて用意して来た袋へ入れた。波に追はれて、尻餅をついた友達もあつた。

その日の夕刻、一同は鯨波へ着いてみた思ふ存分波と戯れて、僕等はホテルへ戻つて来た。折から水平線に沈みかけた太陽が邊り一面を夕焼の色に染めて、光を八方に放つてゐる。何とも言はれぬ美しさだ。漸く穏やかになつた波も、きら／＼夕日に輝いてゐる。と、僕等の視線にひよつこり黒いものが浮び上つた。「あつ鯨だ」。五六人が聲を揃えて叫んだ。又一匹。先生に聞いたらやつぱり鯨だといふ。形よく手入れをされた、松の木に囲まれて、この景色を興深く眺め入る僕等の顔も、夕日の色に映えてゐた。

をはり

